

『撰集抄』説話の再構成：兼方説話の場合

著者	安田 孝子
雑誌名	梶山国文学
号	13
ページ	1-18
発行年	1989
URL	http://id.nii.ac.jp/1454/00001662/

『撰集抄』 説話の再構成

——兼方説話の場合——

安 田 孝 子

『撰集抄』に収められる説話のうち、先行説話に類似するものを取りあげ比較検討すると、『撰集抄』の編著者は、必ずしも前の説話をそのまま素直に採り入れていないことに気づく。あらすじのみ用いて形を変え、再構成して面白がっているところがある。「面白がっている」というのは言い過ぎかも知れないが、幾度か『撰集抄』を読むうち、その思いが強くなってくる。説話の扱い方が、他の説話集編者とは違っているのである。『撰集抄』巻八―二十話（九五話）の兼方説話も登場人物の生存年代など調べないで、単純に受けとめながら読む読み方と、諸本間に登場人物名の誤写、異同のないことを確かめながら、そしてまた類話を精査して、生存年代を確認しながら読むのとは大きな違いがある。

何故、このように時代の異なる人物があたかも同世代の人々の如く描かれるのか。何故、登場人物を入れ替えて再構成する必要があるのか、どのような理念のもとに説話を作り直して編纂するのか……といった疑問が浮かぶ。

兼方説話に関連して、早く、西尾光一氏は、時代錯誤について指摘され、上岡勇司氏、松村武夫氏は、『宇治拾遺物語』和歌説話の立場から、また、松尾葦江氏は、『今物語』を通して論及しておられる。参考にさせていただきな

がら、今回は、今一度『撰集抄』編著者の説話再構成の仕方を考える上で、この兼方説話をとりあげたい。

まず、『撰集抄』巻八一二十話（九五話）の本文を次に示す。

待賢門院かくれさせ給てのまたの年の春、兼方と云ふ随身の、彼御所へまいりたりけるに、人は歎の色ありて、元亮の人も侍らねども、花は思事なく、去年にかはらずさきみだれたるを見て、

去年見しに色もかはらず咲にけり花こそ物はおもはざりけれ

と読たりけるを、俊成の聞給て、「上の句は、目出けれども、下の句花こそその句、すこし心にもかなはず。ひてふ風情の心地のし侍り」と、そしり聞え給けり。兼方、此ことをほの聞て、殊取つくるひて、俊成の宿所にまふて、人をたづね出て、「いと便なき事に侍れども、申入べき事の侍りてまいりたる」と申させ給へ」といふに、俊成き、給て、此歌のこと云べきにこそなど心得給て、「今まぎる、事侍り。なにわぎにか侍らん」と、の給ければ、兼方、「かくと申させ給へ」とて、

花こそやどのあるじなりけれ

とばかり云て、出にけり。俊成き、給て、「をちあはれぬ」とぞの給はせ侍りける。

花こそといふ句を「かたぶき給」と聞て、「俊成の父、俊忠の歌の花こそはいかに」と、とがめけるなり。但し、中納言の難じ給へるは、「去年見しに色もかはらでさきにけり」といふまでは、いかなる風情の句もつきぬべけに侍に、『はなこそものは思はざりけれ』といふ、むげによはき句也」と、そしり給へるにこそ。たゞ花こそといふ、「こそ」をにくみ給にはあらじ物を。しかる上は、なにしか俊忠の歌にはひとしむべき。

* 本文は、松平文庫本。句読点、濁点、括弧を付した。引用部分の松平文庫本本文は、歌以外すべてつづけ書きであるが、文意に合わせて適宜改行した。

この兼方説話、あるいは「こぞみしに（いにしへに）」の歌を載せるものは次頁へ表一ゝの通りである。

『撰集抄』の話と比較的似ているのは、表一⑤『顕昭陳状』に採られているものと表一⑥『宇治拾遺物語』第十話（巻一―十話）である。次に本文を示す。

表一⑤『顕昭陳状』（春中 春曙）

略

同（じ）詞なれど、人に随ひ歌によりて、悪く聞ゆる事も侍らん。金葉集に、

秦 兼方

去年見しに色も変らず咲（き）にけり花こそ物は思はざりけれ

此（この）歌は、後三条院崩せさせ給（ひ）て諒闇の年、円宗寺の花を見て詠めり。世の人も「宜（し）」と申（し）ければ、後拾遺撰の時、通俊卿のもとに参（まゐ）りて「罷（り）入（り）侍らばや」と堅（く）申（し）けるに、彼（かの）卿たび／＼詠めて、「歌は宜しけれど、『花こそ』と云（ふ）詞の置（き）様こそ心ゆかね」と侍（り）ければ、物も申さず立（ち）侍（り）にけり。侍どもの居あひて侍（り）ける所に寄りて申（し）けるやう、「四条大納言殿（の）

〔表一〕類話表

右の歌の作者	用ひける山は花こそやどのあるはなこりけれ」の歌の引用	自作の歌について聞くため訪れた所	花の咲いている所	の歌「こぞ見しに、作者」	崩御	兼方説話	
						作	品
				に初兼 し句「方 へにい	三条院	①讃岐典侍日記	1109頃か
				兼方	後三条院	②金葉和歌集 二度本 卷9 524 三度本 卷9 517	(1124) (1127)
				兼方		③袋草紙 50	1156~1158
四條大納言 (公任)	み下 引用句の	(通俊)		兼方		54	
			円宗寺	兼方	後三条院	④宝物集、九冊本 第一冊、5	1178頃
四條大納言 (公任)	ら初 引用句か	通俊	円宗寺	兼方	後三条院	⑤顕昭陳状	1194頃か
四條大納言 (公任)	ら初 引用句か	通俊	円宗寺	兼久	後三条院	⑥宇治拾遺物語 10	1221頃か
	み下 引用句の	を(後拾遺 らふ人「え		兼方		⑦今物語 41	1239~1252
俊忠 (俊成の父)	下句のみ引用	俊成	(御所 待賢門院の御所)	兼方	待賢門院	⑧撰集抄 8-20	1250頃か

御歌に、

春来てぞ人も問（ひ）ける山里は花こそ宿の主なりけれ

と詠み給へる歌は、彼（の）大納言の一の秀歌とこそ申（し）侍るに、『花こそ』と云（ふ）詞は同（じ）所に置き
て侍るを、撰集承はらせ給（ふ）ほどにては、如何にかゝる僻事をば被_レ仰にか。此（の）一事にて万こそ推し量ら
れ給へ」とて、立（ち）侍（り）にけり。同（じ）詞なれど、人によりて悪くなるは定（ま）れる事なれば、始（め）
て可_レ申に非ず。

（新校六百番歌合）

表一⑥『宇治拾遺物語』

第一〇話 秦兼久向_二通俊卿許_一悪口事

今は昔、治部卿通俊卿、後拾遺をえらばれけるととき、秦兼久、ゆきむかひて、おのづから歌などや入ると思て、う
かゞひけるに、治部卿、出でゐて物語して「いかなる歌か詠みたる」といはれければ、「はかゞしき候はず。後三
条院かくれさせ給てのち、円宗寺に参りて候しに、花の匂ひはむかしにもかはらず侍しかば、つかうまつりて候しな
り」とて、

「こそ見しに色もかはらずさきにけり花こそ物はおもはざりけれ

とこそ、仕うまつりて候しか」といひければ、通俊の卿「よろしく詠みたり。ただし、けれ、けり、けるなどいふ事
は、いとしもなきことばなり。それはさることにて、花こそといふ文字こそ、女のわらはなどの名にしつべけれ」と
て、いともほめられざりければ、言葉すくなにて立ちて、侍共ありける所に、「此殿は、大かた歌の有さま知り給はぬ

にこそ。かゝる人の、撰集承りておはするは、あさましき事かな。四条大納言歌に、

春きてぞ人もとひける山里は花こそやどのあるじなりけれ

と詠み給へるは、めでたき歌とて、世の人口にのりて申めるは。その歌に、人もとひけるとあり、又、やどのあるじなりけれ、とあめるは。花こそといひたるは、それにはおなじさまなるに、いかなれば、四条大納言のはめでたく、兼久がはわるかるべきぞ。かゝる人の撰集うけたまはりてえらび給、あさましき事なり」といひて、出でにけり。

侍、通俊のもとへゆきて、「兼久こそ、かうく申て出でぬれ」と語ければ、治部卿、うちうなづきて、「さりけりく。物ないひそ」といはれけり。

(日本古典文学大系)

『顯昭陳狀』に引用の説話と『宇治拾遺物語』の話は、共に、通俊卿が、『後拾遺和歌集』を撰進する時の出来事とし、兼方(あるいは兼久)が、歌を読んだのは、後三条院が崩御された後のこととしている。歌は、結局『後拾遺和歌集』には入集しなかったが、表一②『金集和歌集』(巻九 雑部)にとられ、「後三条院かくれおはしまして又のとしのはる、さかりなりける花を見てよめる 左近府生秦兼方^(注6)」と詞書してこの歌を載せる。

顯昭は、歌論の立場から論じ、『宇治拾遺物語』編者は、勅撰集を撰進する程の歌人藤原通俊が、反論されてたじたじとしている姿に興味を感じて、この説話を収載したと思われる。

先の表一のうち、年代的に古い作品は①『讃岐典侍日記』である。三月十九日、堀河天皇追善の御月忌の法会の折、堀河院の桜を見て、その昔、兼方が詠んだという歌の通り、花は、昔と少しも変わらず美しく咲いているとするのである。初句は「いにしへに」とある。また、「三条院におくれまいらせて」(岩瀬文庫本^(注7))とある。『讃岐典侍日記』の

諸本は、このように「三条院」^(注8)とするが、これは、「後三条院」の誤りであるとして注釈書の類は扱っている。しかも、この堀河院の桜を見て天皇を追懐する部分は、著者自身の筆になるものではなく、加筆によるものであろうとされているのである。^(注9) 何時頃、補筆されたかわからないが、歌論書・説話などとの関連も注目されるところである。

表一③『袋草紙』五〇語は「後拾遺集」は大変良い歌を三首漏らしている」として、頼宗、隆経の歌と共にこの兼方の歌をあげている。同書五四話は、「後拾遺集」が、「小鰭集」と異名を付けられ、非難されるいきさつについて述べるため、この兼方説話を要約して用いている。兼方の「花コソノ歌」といえば、すぐにも、どの歌を指すかわかるといった書き方である。誰が崩御した時の詠歌であるかについては、五〇語・五四話共に触れていない。

表一④『宝物集』九冊本「一」には「

秦 兼方

去年みしに色も替らず開にけり花こそ物はおもはざりけり

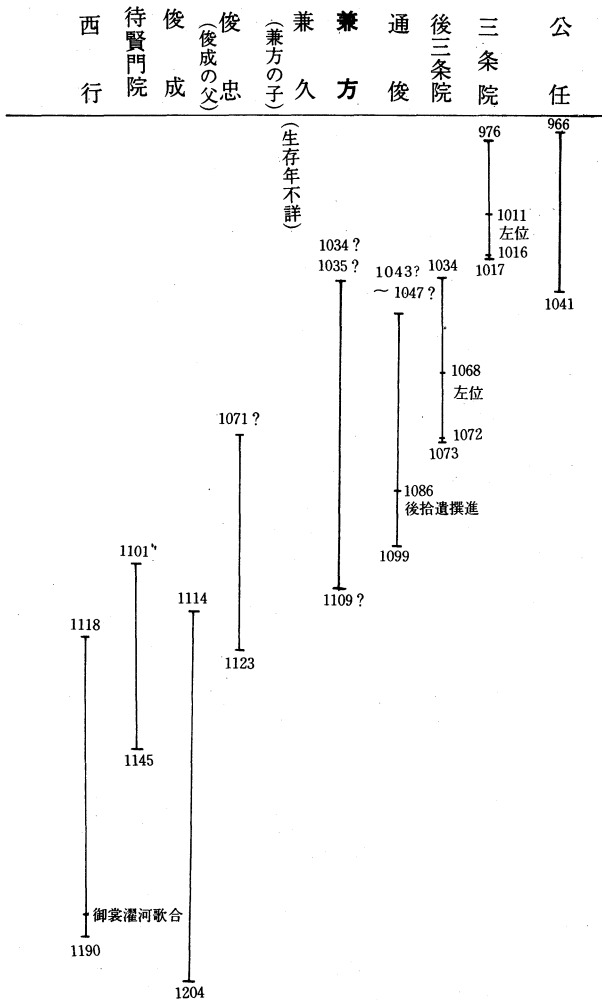
此歌、円宗寺の花をみて、後三条院の御事を思いで、よめるなり」(古典文庫)とある。『宝物集』の場合、諸本の成立事情が複雑であり、「こそみしに」の歌を引くのは、片仮名三卷本、第一種七卷本、第二種七卷本の系統のみである。いずれも「円宗寺」の花を見て、「後三条院」^(注10)の御事を想い出して詠んだものとして扱っている。

表一⑦『今物語』四一話については、『今物語・隆房集・東斎随筆』(中世の文学)^(注11)の解説に詳しい。『今物語』では、「こそ見しに」の歌が、何時どのような状況のもとで詠まれたものかということには触れていない。関心がなかったものか、話の簡略化のため省いたものか、あるいは依拠した資料に記載がなかったか、いずれにしても、四一話では、兼方の『後拾遺集』撰者への反駁が中心となり、短い形に話をまとめている。そして、「いとはしたなかりけり」と端的に評語を記す。

さて、今回問題とする表一⑧『撰集抄』であるが、この話は、詩歌説話を多く集めた巻八に収められる。ただし、『撰集抄』巻八は、諸本により説話配列が大きく異なり、殊にこの兼方説話は、その異同の原因となり得る要素を持っているように思われる。先ず、右のような特異な存在であることを確認して、次に、登場人物を類話と比較する。「こ

（表二）登場人物生存年表

〈表二〉登場人物生存年表



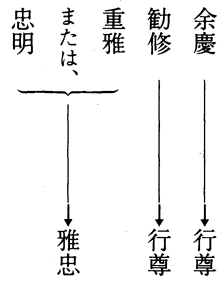
ぞ見しに」の歌は、「待賢門院」が亡くなられて後、「待賢門院の」御所」の花を見て詠んだとする。何故「後三条院」を「待賢門院」とし、「円宗寺」を「待賢門院の」御所」とする必要があったのか。また、通俊を俊成に変え、四条大納言公任の名歌「春きてぞ人もとひける山ざとは花こそやどのあるじなりけれ」(拾遺和歌集 卷一六 1015 詞書「北白河の山庄に、花のおもしろくさきて侍りけるを見に、人人まうできたりければ」)を俊忠の歌とするのは、如何なる必然性があったというのであろう。ここで、登場人物の生存年代をみると右の表二の如くとなる。

『撰集抄』編著者は、『撰集抄』があたかも西行によって作られた如く説話を改変し編纂した。「作者」は、既に、現実の作者「某」から「西行」に入れ替えられ、そして、卷八―第二十話の兼方説話も、先に述べた如く登場人物の入れ替えがなされた。従って、次のようになる。

実際の作者「某」↓西行

後三条院	↓	待賢門院
通俊	↓	俊成
公任	↓	俊忠

これは、卷八―第二十八話・二十九話で、主人公「行尊」に合わせて、登場人物を、



と、変更しているのと、似た手法である。

〈表二〉の関係人物のうち、先ず問題にすべきは、本来ならば、主人公兼方であろうが、ここでは、『撰集抄』存在の前提たる「作者」……仮托された「西行」にも注目しなければならない。従って、交替しなかった主人公「兼方」以外は、常に入れ替えた人物と西行とのかかわりをみながら、『撰集抄』編纂の姿勢を求める必要がある。

- (一) 兼方
- (二) 待賢門院
- (三) 俊成
- (四) 俊忠 と順次みていくこととする。

(一) 兼方

兼方の生存年代は、判然としないが部分が多いが、上岡勇司氏の論に依れば、長元七、八年（一〇三四、一〇三五）頃生まれ、天仁二年（一一〇九）没、年令七十五、六歳であったとのことである。

『宇治拾遺物語』のみ、話の主人公を「兼久」とするが、兼久は、『今物語』四四話にも「兼弘は兼方が孫にて、兼久が子なりければ……」とある通り、兼方と兼久は親子関係にあるものとして知られていたと考えられる。『宇治拾遺物語』の「兼久」は、何かの誤伝によるものであろう。

『撰集抄』の場合、兼方が、一一〇九年没とすれば、その折、俊成は、未だ生まれていないから、現実には、兼方と俊成が和歌に關して論ずる機会はあり得ない。『撰集抄』作者は、主人公兼方のみは人物入れ替えをしなかった。そして、兼方の機転の利く応酬とその後⁽¹⁾に付す歌論的展開に重点を置いている。恐らく、兼方は、出自、生存年などあまり知られていなかったと推測できる。

(二) 待賢門院

それでは『撰集抄』編著者は、どうして「待賢門院」としたか。待賢門院は、『女院小伝』に「待賢門院。藤原璋子。鳥羽后。崇徳後白川母。大納言公実卿女。母備中守隆光女。従二位藤光子。永久五十二叙従三位。十八。同十七為女御。同六正廿六為中宮。^{十九。}天治元十一廿四丁酉院号。^{廿五。}康治元二廿六為尼。^{真如法。四十三。}久安元八廿二御事。^{四十五。或四十六。}」(群書類従 第五輯)とある。

右の通り、待賢門院は藤原璋子。父は藤原公実、母は藤原光子。康和三年(一一〇二)生まれ、鳥羽天皇の皇后で、崇徳・後白河両天皇の母である。天治元年(一一二四)院号宣下、待賢門院と称された。久安元年(一一四五)四十五歳にて崩御。待賢門院崩御の年には、早や既に兼方は生存していない。待賢門院については、角田文衛著『待賢門院璋子の生涯 椒庭秘抄』(朝日選書)に詳しいので、同書を参照し、また西行の側からは、目崎徳衛著『西行』(人物叢書180 吉川弘文館)を参考にして、西行と待賢門院のかかわりをみてゆきたい。

西行は、待賢門院(藤原璋子)の兄に当る徳大寺実能の家人であった。目崎氏は、「遁世以前の西行は、主命によって美貌の女院に使う機会も多くあつたろう」として『山家集』^(注15)の

「待賢門院かくれさせおはしましにける御あとに、人々またの年の御はて

まで候はれけるに、南面の花散りける頃、堀河の局の許へ申し送りける
七七九 たづぬとも 風のつてにも 聞かじかし 花と散りにし 君がゆくへを

返し

七八〇 吹く風の ゆくへ知らする ものならば 花と散るにも おくれざらまし

十月中の頃、宝金剛院の紅葉見けるに、上西門院おはします由聞きて、
待賢門院の御時思ひ出でられて、兵衛殿の局にさし置かせける

七九七 紅葉見て 君がためとや 時雨るらん 昔の秋の 色をしたひて

返し

七九八 色深き 梢を見ても 時雨れつつ ふりにしことを かけぬ日ぞなき

をあげられて、「若き日の西行は女院その人の知遇も得たもののように想像される」(右書24頁)と述べておられる。

右の他『山家集』七三六・七三七、七四〇・七四一、七四四・七四五、七四六・七四七、七四八、七五〇・七五一、

七八二、八一七・八三一、八五四・八五五 などを見ても西行が待賢門院付きの女房たちと歌を贈答し、あるいは、

待賢門院の生んだ皇女(上西門院)、あるいは不遇の崇徳天皇、鳥羽天皇の崩御に関連するものなど、西行が待賢門院およびその周辺の人々に並々ならぬ関心を持っていることがわかる。

『台記』卷二 康治元年三月十五日の条に、次の記事がある。

十五日戊申、令_レ侍共射_二弓、西行法師来云、依_レ行_二一品経、両院以下、貴所皆下給也、不嫌_二料紙美惡、只可_レ用_二自筆、余不_二輕承諾、又余問_レ年、答曰、廿五、去々年出、家廿三、左衛門大、左衛門少抑西行者、本兵衛尉義清也、以_二重代勇士_二仕_二法皇、自_二俗時、入_二心於仏道、家富年若、心無_レ愁、遂以遁世、人歎_二美之_二也（史料大成）

西行は、待賢門院出家の後、頼長を訪れ、右記のように話した。角田氏は、前掲書において、これは、西行が待賢門院のために結縁経を勧進したことを意味していると指摘しておられる。結縁経は、西行が発意したものであること、そこには女院に寄せた熾烈な渴仰が見られること、また、若い頃の俊成が、待賢門院をめぐる歌壇の一人であること、俊成と西行との交誼は早くから萌していたことにも言及しておられる。こうした西行周辺の事を知っている『撰集抄』筆者は、兼方が「歌を作った時点」を「待賢門院」崩御の後と設定したものと思われる。人物の入れ替えは、必ず西行とかなり近い人であり、しかも、文学などを通して、西行とその人物の関係が知られている場合に限られている。

(三) 俊成

西行は、自歌合である『御裳濯河歌合』の判を、当時の歌壇の権威者、藤原俊成に依頼した。両人の間柄は、次の俊成の歌集『長秋詠藻』（1）、『山家集』一二三九・一二四〇（2）、『御裳濯河歌合』（3）によっても窺われる。

(1) 長秋詠藻

歌合といふことする人人の勝劣定むる事をこなたかなたよりふれつかはすことのみあるを、とかうかへさひ申しながら、いなびがたき時はおぼえぬことどもをかきつけ侍るもよしなくて、ちかき年より此方、

ながくちかひたりとてせぬ事になりにしを、
がよ見つめたる歌どもを三十六番につがひて伊勢太神宮にたてまつらんずるなりとて、
けしるしてと、しひて申ししかば、おろろ書付けてつかはしける歌合のはしに、
けるうた

五九四 藤なみをみもすそ川にせき入れてもえの松にかけよと思ふ

返しに、歌合のおくにかきつける

五九五 ふぢなみもみもすそ河の末なればしづえもかけよ松のもも枝に

ふぢはらももとは大中原なりし心にや

又おくの歌

五九六 契りおきし契のうへにそへおかんわかの浦ぢのあまのもしほ木

五九七 この道のさとりがたきをおもふにも蓮ひらけばまづ尋見よ

返し二首、後日送之

円位上人

五九八 和歌の浦に塩木かさぬる契をばかけるたくもの跡にてぞみる

五九九 さとりえて心の花しひらけなば尋ねぬさきに色ぞ染むべき

(国歌大観)

(2) 『山家集』

左京大夫俊成、歌集めらるると聞きて、歌遣はすとして

一二三九 花ならぬ 言の葉なれど おのづから 色もやあると 君拾はなん

かへし

俊成

一二四〇 世を捨てて 入りにし道の 言の葉ぞ あはれも深き 色も見えける

(新潮日本古典集成)

(3) 御裳濯河歌合

しかるのみにあらで、よはひかたぶき、老にのぞみてのちは、あしたにみることに、ゆふべにわすれ、よひのむしろに思ふ事、あかつきの枕にはるゝことなければ、ふるきときの証歌、いまの世の諸作、みることにきくこと、ひとつも心にのこすことなし。よつてちかきとしよりこのかた、ながくこのことをたちをはりにたれども、上人円位、しやうねんのむかしより、たがひにをのれをしれるによりて、二世のちぎりをむすびをはりにき。をのゝ老にのぞみてのち、かの離居は山川をへだてたりといえども、こけの芳契は旦暮に忘るゝ事なし。そのうへに、これはよの歌あはせの義にはあらざるよし、しめてしめさるゝおもむきをつたへたてまつるによりて、れいの物おぼえぬ僻ことゝもをしるし申べきなり。

(西行全集)

以上によつても明らかのように、西行と俊成は、和歌の上で親交があった。

(四) 俊忠

異説もあるが、俊成の父にあたる人物である。歌会、歌合にも多く参加し、歌人として知られていた。公任もまた有名歌人であるから、公任の歌を俊忠作とするのには無理がある。『撰集抄』作者は、「俊成の父、俊忠の歌の花こそはいかに」としているところから、俊忠、俊成が親子であることを認識している。親の歌であることを読者に知らせながら何気ない振りをして、自然な形で書く必要があった。「あなたの父上の「花こそ」の歌と同じ使い方ですよ」と相手の父親の歌を反論材料とすれば、それだけ話は面白くなる。^{注14} これもまた、単に時代を下げるだけでなく、西行とかかわりのあつた俊成の父という発想のものに入れ替えられたと考える。^{注15}

以上、検討したように、『撰集抄』の兼方説話においては、主人公「兼方」のみそのままとし、他の人物はすべて替えられた。交替した人々は、西行に合わせて時代が下がっていることは勿論であるが、さらに、全くいい加減というのでもなく、必ず西行周辺の人物であることがわかる。しかも、和歌、説話その他を通し西行との関連がよく知られた人ということになる。

『撰集抄』の巻三―第六話「宝日上人 歌」、第六―第一〇話「性空上人事」、及び巻八―第二十八、二十九話「行尊 歌」の場合は、二つ乃至三つの話を同一人物の行いに結び付け、それぞれ新たな主人公像を造り出すといった、いわば合成した形に再構成された。この兼方説話は、先行の同文的説話一つを用いて、主人公のみ残し他をすべて入れ替え、それなりの歌論めいた説話に作り変えた。しかも、西行自身が見聞きしたことを記述した如くに構成しなければならぬから、一旦入れ替えを始めれば、「西行」と無関係の人物でも困る。また、西行周辺の人に置き換えた方が話として面白い。

『撰集抄』の諸説話の中には、単に歌の作者を替えたものから、行尊説話のように大々的に変換するものもある。その手法はさまざまであるが、いつも作者が「西行」である前提に立ち、一応、一寸見た目にはその虚構が見顕わされないように配慮されている。それ故、芭蕉も素直に西行作と考えていたし、登場人物の生存年代など気にしないで読めば、これまた面白く読めるのである。兼方説話も、こうした実作者の配慮に基づいて再構成されたといえる。作者が「西行」に仮託された時点で、既に実作者は現実の自分から解き放たれ、それこそ思うように書き換えが出来る訳であるが、如何にしても「西行」という枠組だけは無視できない。そこに再構成の場合の限界があり、無理も生じて、この兼方説話の如く矛盾した説話が生れるのである。

注

- (1) 『撰集抄』岩波文庫 解説。
- (2) 秦兼方とその和歌説話に関する考察——『宇治拾遺物語』の一説話から——(語学・文学 一三卷 昭和五〇・三、『和歌説話の研究 中古篇』所収)
- (3) 『宇治拾遺物語』和歌説話の特色について 松村武夫(『宇治拾遺物語——説話文学の世界——第二集』(笠間書院)
- (4) 『今物語・隆房集・東斎随筆』(中世の文学) 久保田淳・大島貴子・藤原澄子・松尾葦江 校注 三弥井書店刊。『今物語』解説は、松尾葦江氏担当。
- (5) 『新校六百番歌合付 顕昭陳状』(小西甚一編 有精堂)に依った。『六百番歌合』は、主催者一族、御子左家一派、六条藤家一派の歌人たちによるもので、判者は、俊成であった。この判に対し、六条藤家派の顕昭が難陳したものが『顕昭陳状』である。『撰集抄』編著者が、通俊を俊成に置き換えたヒントが隠されているかも知れない。
- (6) 『新編 国歌大観』の本文に依る。歌番号も同書に従った。『金葉集研究基礎資料稿』(後藤重郎・杉戸千洋著 和泉書院)に示された校異に依れば、『金葉和歌集』(二度本)ノートルダム清心女子大学所蔵、伝橋本公夏筆本は、「右近将曹秦兼房」とある。「兼

房」は恐らく「方」と「房」の草体の類似による誤写と思われ、諸本の如く「兼方」が正しい。

(7) 新典社善本叢書4『讀岐典侍日記』影印に依った。

(8) 『校本讀岐典侍日記』(今小路覚瑞・三谷幸子著 初音書房刊)を参照したが、「後三条院」とする本文は見当らない。

(9) 『讀岐典侍日記 研究と解釈』草部了四著 笠間書院 一三四頁に依った。

(10) 『統群書類従 第三十二輯下』二二二頁に「此歌八円宗寺ノ華ヲ見テ後。三条院ノ御事ヲ思出テ読侍リケル」とするが、これは、「……見テ、後三条院ノ……」とあるべきか。

(11) 注4参照。

(12) 「春きてぞ」の歌は、『拾遺和歌集』、および、表一③⑤⑥⑦⑧に掲げた書のほか次の各書にもみられる。『拾遺抄』卷九、388、『公任集』、『金玉集』21、『玄々集』52、『今昔物語集』第二四―第三四話、『古本説話集』上卷第二話、『新撰朗詠集』上卷114、『後六々撰』、『古来風舩抄』下卷。ただし、下句のみを記すものもある。

(13) ここでは、仮に新潮日本古典集成に依った。

(14) 非難する人に対し、その人の父親の歌を用いて反論する説話は、例えば、『十訓抄』第四―十一話、『古今著聞集』卷第五―一八八話)などにもみられ、当時は、面白く読まれた話の一つの型であったと考えられる。

(15) 俊忠・俊成父子は、『撰集抄』では、卷八―第三十二話(二〇七話)に蹴鞠に関して載せられる。俊忠は、上記の前話(二〇六話)、及び、卷二―第八話(十六話)にも名がみえ、編著者の関心が窺える。

本稿は、昭和六十二年六月十三日(土)、名古屋中世文学研究会における発表をもとにした。その折種々ご助言いただいたことを感謝申し上げます。